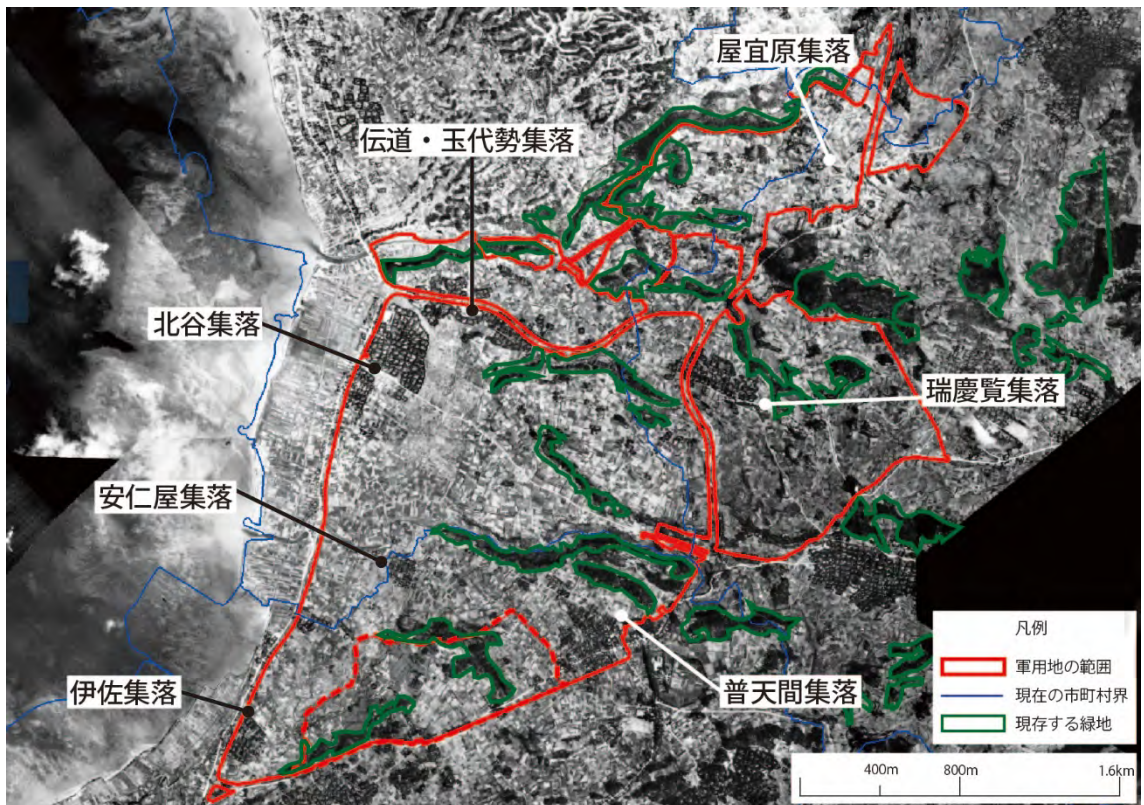


(2) キャンプ瑞慶覧

(2) - 1 駐留軍用地と旧集落との位置関係



図Ⅲ-4-8 キャンプ瑞慶覧周辺の航空写真(2017年現在)



図Ⅲ-4-9 キャンプ瑞慶覧周辺の航空写真(1945年当時)

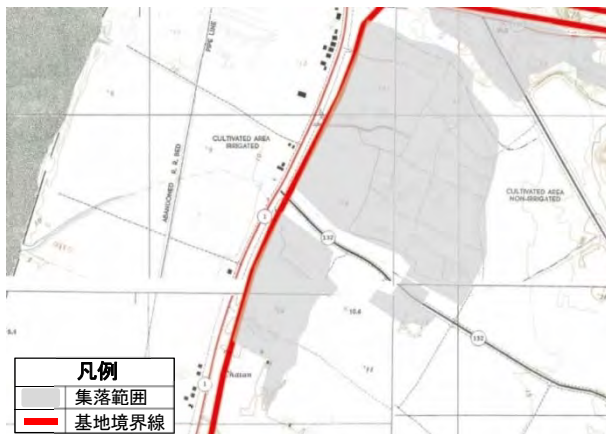
(2) - 2 北谷・玉代勢・伝道集落に関する既存文献等から得られた知見

(2) - 2 - 1 北谷集落

<p>【地形】・沖積低地に立地し、典型的な碁盤目状の集落形態をもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海拔 1.5m の平地の中で、周囲には県内有数の美田地であった北谷田圃（北谷ターブックワ）と肥沃な畑に囲まれていた。北谷田圃は（普天間川からの取水が困難となったため）明治初期にサトウキビ畑へと転換された。 <p>【集落】・番所（現在の役場）が置かれ、明治 19 年に小学校が設置されるなど、古くから行政と教育の中心地であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かつて白比川の河口は山原船が出入りし、港として賑わっていた。また、 <p>【宅地】・屋敷の向きは南向きで、理由としては、桑江集落と同様に山を背にする配置としたためと考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・屋敷囲いには、フクギが多く見られた。 ・屋敷は道よりやや下がっており、屋敷の周囲には溝を設けていた。敷地をやや掘り下げることで防風効果を高めていたと考えられる。 <p>【道路】・集落の西側（現在の国道 58 号）の馬場では、競馬や綱引きが行われた。馬場沿道には大小さまざまな商店が立ち並び、メインストリートとなっていた。</p>
--

歴史・文化	生活空間	<p>【集落】・ゴバン型集落であり、約 280 世帯からなり、どの屋敷もフクギの大木の囲いが生い茂っていた。</p> <p>【屋敷】・北谷町の屋敷は、基本的に他市町村同様、南向きであった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・屋敷林の多くはフクギであった。 <p>【馬場】・西側には南北に縦貫する北谷街道（馬場）があり、南北に約 550m、幅 22m ある広い馬場であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通りには、北谷郵便局、小学校、農協、医院、その他大小の商店が立ち並んでおり、字北谷のメインストリートとなっていた。 <p>【番所】・北玉小学校の敷地内に北谷番所があった。</p> <p>【学校】・明治 19 年に北谷尋常小学校とし設立し、大正 3 年に北玉小学校となった。</p>
	生産	<ul style="list-style-type: none"> ・域内の耕作地は、北谷田圃（チャタンターブックワ）と呼ばれる美田地であった。 ・さとうきび、米の他にいもや豆類を作っていた。
	史跡	<ul style="list-style-type: none"> ・樹昌院（寺）：北谷長老を祭る小高い丘陵 ・ノロ殿内、桑江殿内：北谷ムラの神様を祭る ・クワディーサービジュル：北谷と北谷ヌ前屋取の境にあった拝所。石を囲む小さな石の祠があった。
	移転先	<p>北谷町謝苺：米軍の占領後、現在までキャンプ瑞慶覧として接收されていて居住不能である。昭和 26 年屋取であった北前が字となる。</p>
自然環境	地形・地質	<ul style="list-style-type: none"> ・白比川と佐阿天川のあいだに拓けた平野部に集落があった。 ・白比川沿いに走り北谷グスクが立地する石灰岩堤の西側近くに立地している（海拔 1.5m の平地）。 ・地質については、東側はマージ（島尻真地）、村の周辺は砂地。
	緑地	<ul style="list-style-type: none"> ・長老山：北谷長老はじめ、樹昌院の住持の墓所と伝えられる。現在、4 基の墓碑があるが、北谷長老の墓碑は見当たらない。

水資源	<p>【カー】・白比川：水質が良いため、生活用水として使われたり、水路を作って田圃に流し込んでおり、農業用水としても貴重な水源となっていた。</p> <p>・スーガー（塩川）：戦前は澄みきっており、おいしい水だったが、現在では飲料水には適さず、農業用水に利用。字北谷の御願をする時は最初に拝む場所。</p> <p>【クムイ】・馬場南側に馬浴せ池（ウマアシグムイ）があった。頑丈な石垣で囲まれており、水深は1m程度。</p>
-----	---



図Ⅲ-4-10 北谷集落周辺の地形
(米軍作成地図(1948年作成)に加筆)



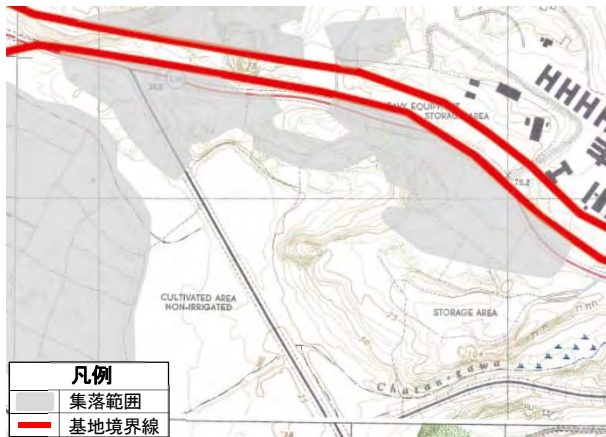
図Ⅲ-4-11 北谷集落の移転先

(2) - 2 - 2 玉代勢集落

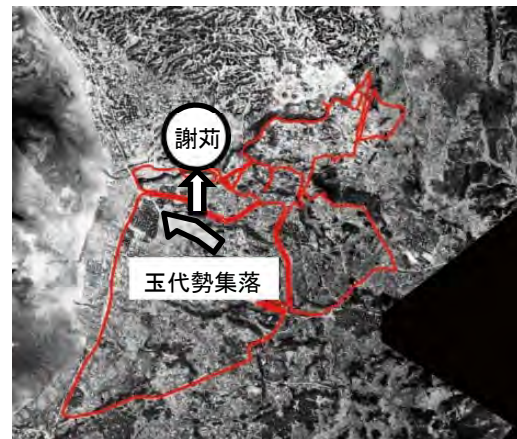
<p>【地形】・白比川沿岸に走る石灰岩の緩斜面（北谷部落東北の丘陵地）に位置する。南側の丘は長老山といい、北谷長老の拝所があった。</p> <p>【集落】・集落の北側と南側は小高い丘で、集落は東西に細長く延びていた。</p> <p>【宅地】・北谷集落同様、屋敷の向きは南で、山を背にする配置であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・屋敷内にはカーブチやオートーなどの柑橘類も多く、季節には他所から買い入れに来たほどである。

歴史・文化	生活空間	<p>【集落】・北側と南側は小高い丘で、集落は東西に細長く伸びていた。58～60戸程度</p> <p>【クムイ】・多くの家庭にクムイグラーがあり、ウムアライやティーヒサアライに利用。</p> <p>【ムラー】・玉代勢原 80。近くにサーターヤーがある。</p>
	生産	<ul style="list-style-type: none"> ・さとうきび作りが中心であった。 ・屋敷内にはカーブチなどの柑橘類が多くある。
	史跡	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒージャーガー：玉代勢原にあり拝所となっている古いムラガー。水は利用していない。 ・長老山：北谷長老の墓所で、拝所となっていた。 ・土帝君：小高い丘にある平松の根元に石で造られた祠に土帝君が祀られていた。
	移転先	北谷町謝苺：沖縄戦終了後、全地域が米軍のキャンプ瑞慶覧として接収された。昭和26年玉上・大村となる。

自然環境	地形・地質	<ul style="list-style-type: none"> ・白比川沿いに走る石灰岩堤南西の緩斜面に立地。 ・マージ、ジャーガル、ジンナー、ウジマジャーガル
	緑地	<ul style="list-style-type: none"> ・イチャバルモー：ソテツが生えており、モーアシビーの場。
	水資源	<ul style="list-style-type: none"> ・イーグチガーラ：チャタンターブックゥへと流れ込んでいく川 ・チブガー：集落の東側にあり、ウブガーであった。若水や飲料水をチブガーから汲み、それ以外は各家の井戸を利用していた。



図Ⅲ-4-12 玉代勢集落周辺の地形
(米軍作成地図(1948年作成)に加筆)



図Ⅲ-4-13 玉代勢集落の移転先

(2) - 2 - 3 伝道集落

【地形】	・白比川沿岸に走る石灰岩の緩斜面に位置する。
【宅地】	<ul style="list-style-type: none"> ・北谷集落同様、屋敷の向きは南で、山を背にする配置であった。 ・屋敷囲いには、防風林としてのガジュマル、ユーナ、フクギ等と用材としての竹があった。
【その他】	<ul style="list-style-type: none"> ・集落北側の白比川に沿って、東西に延びる丘陵には、北谷三箇（北谷・玉代勢・伝道）の聖地となっている北谷グスクが位置する。 ・北谷グスク内には、イリヌウタキ、トゥン、アガリヌウタキの拝所がある。ほとんどの行事は北谷三箇で一緒に行っていた。

歴史・文化	生活空間	<ul style="list-style-type: none"> 【道路】・集落の東西に通る前道では、綱引きを行っていた。 【集落】・24戸の集落。屋敷囲いは石垣、フクギ・ガジュマル・竹である。
	生産	<ul style="list-style-type: none"> ・農業が主で、芋やサトウキビを作っていた。 ・白比川河口の左岸の低地は、水田・畑地として利用 ・馬と肉牛を7割の家が飼育
	史跡	<ul style="list-style-type: none"> ・北谷城：白比川沿いの丘陵（幅100～150m、長さ500m、標高44.7m）の頂点に位置する。12世紀以降に築城され、16世紀にはその役目を終える。北谷三箇の拝所があり、中央にトゥン（殿）、東側にアガリヌウタキ、西側にイリヌウタキがある。 ・ヤマガマー：伝道の発祥の地と言われ、拝所となっている。鎮守の森 ・リンドーガー：ヤマガマーの南側にあった井戸で、ウブガーとして利用されていた。
	移転先	北谷町謝苅：沖縄戦で米軍に占領され、現在でも米軍基地キャンプ瑞慶覧として接収されたままで、字内に住民はいない。昭和26年字の再編成が行われ、大村・吉原となる。 <u>住民は謝苅区などに移っている人が多い。</u>

自然環境	地形・地質	・白比川沿いに連なる緩斜面（東から西方向に傾斜）に立地し、字玉代勢の居住域と隣接する。
	緑地	
	水資源	・ヤマガー：山川原 78。飲料水や田んぼの水源 ・スーガー：北谷・伝道の人々が豆腐作りに使用

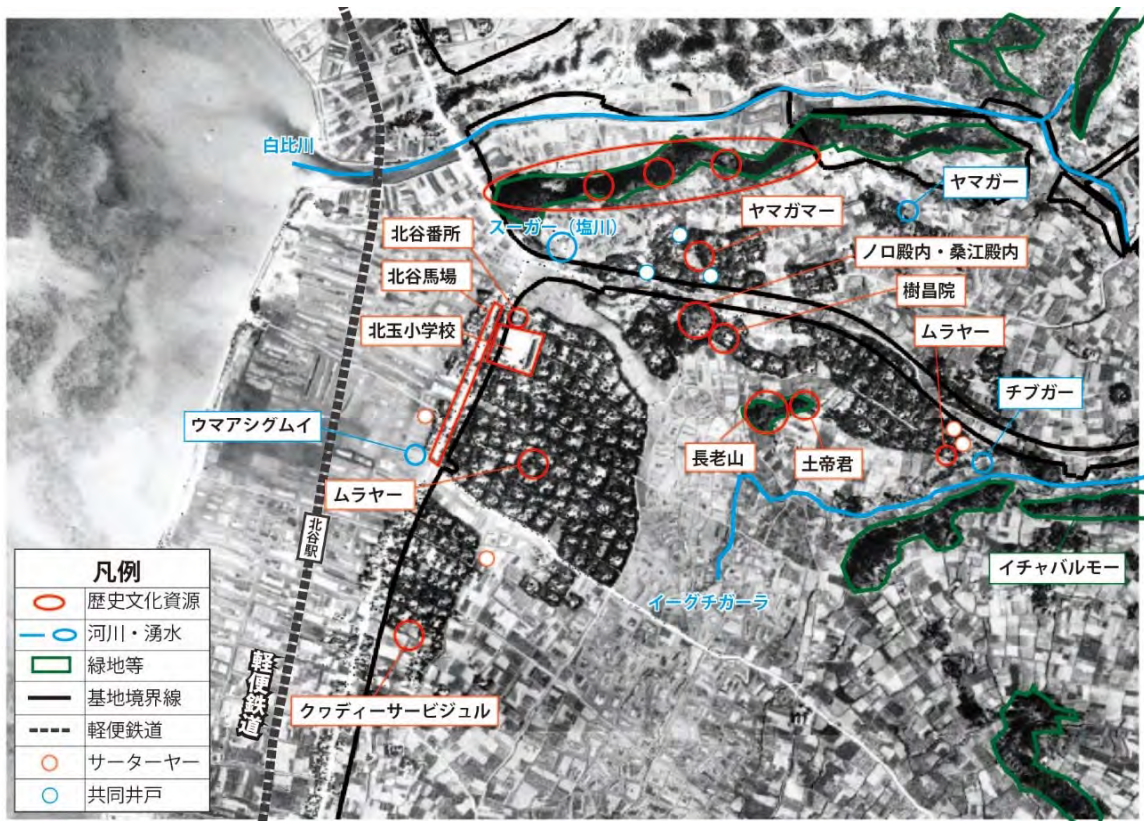


凡例
 集落範囲
 基地境界線

図Ⅲ-4-14 伝道集落周辺の地形
 (米軍作成地図(1948年作成)に加筆)

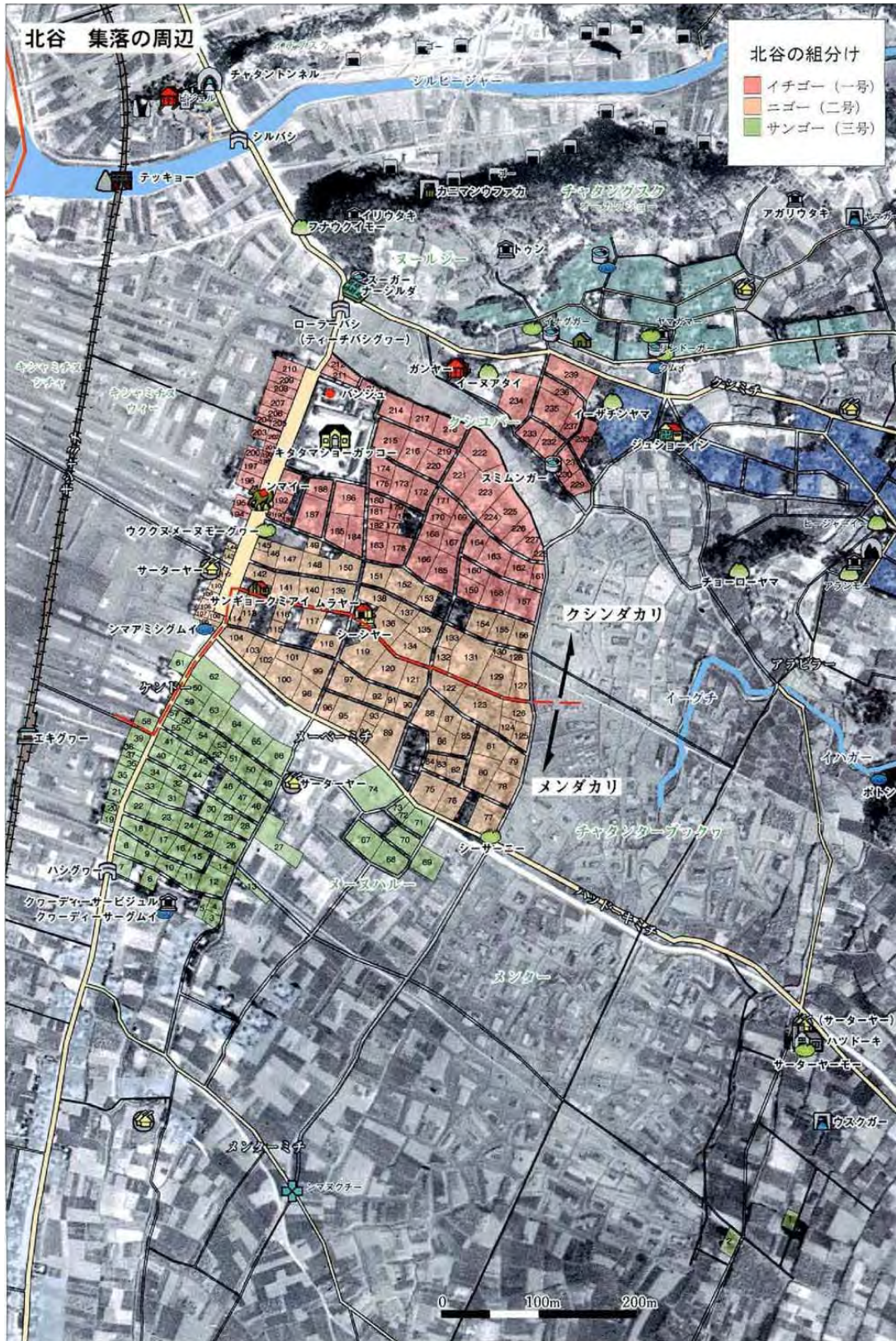


図Ⅲ-4-15 伝道集落の移転先



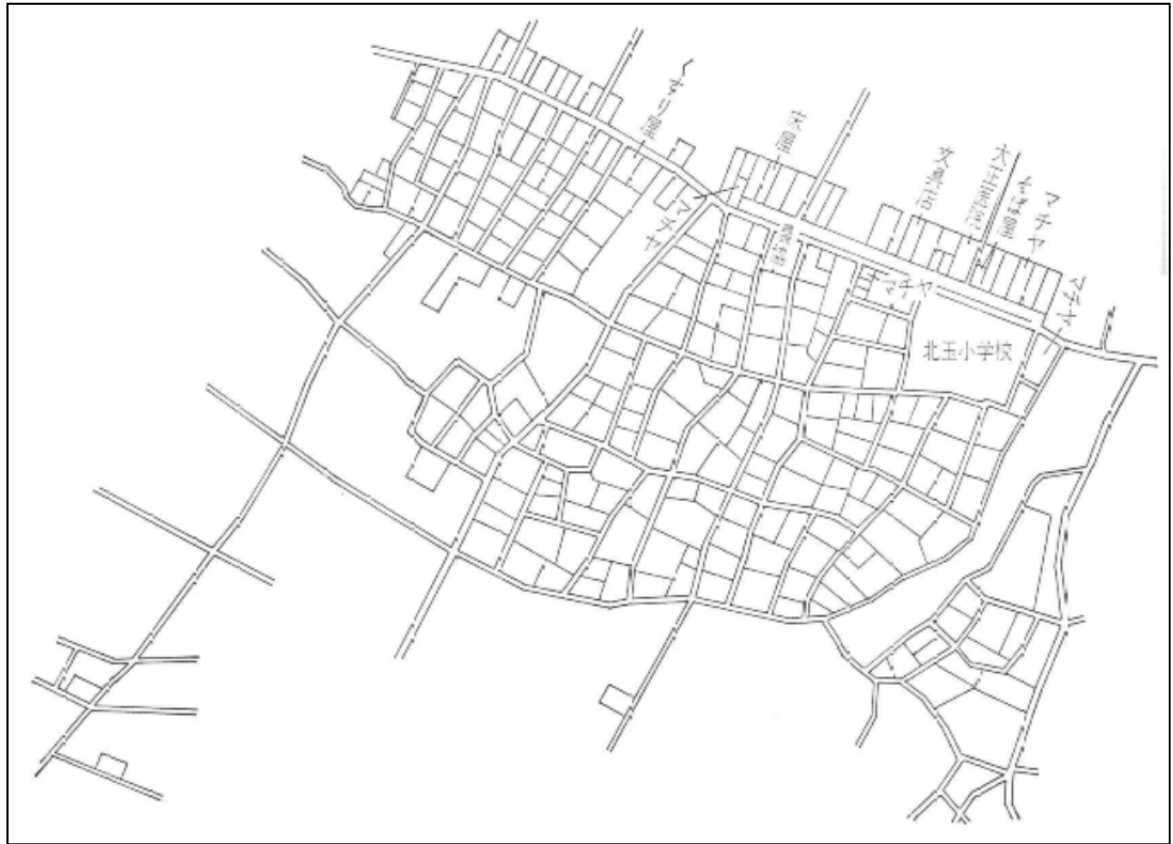
図Ⅲ-4-16 北谷・玉代勢・伝道集落構成要素図

【参考資料】



出典: 北谷町の地名(北谷町教育委員会)

図Ⅲ-4-17 北谷集落周辺の地名



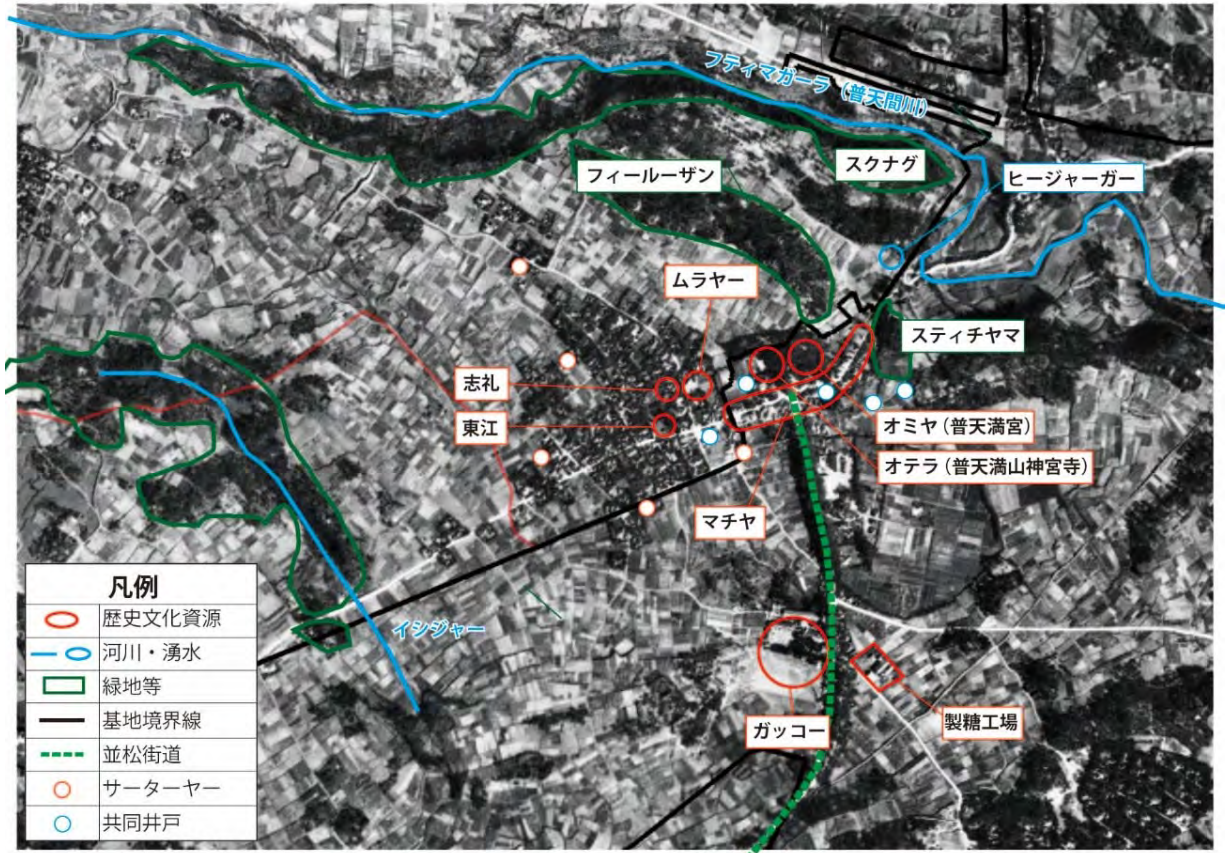
出典：北谷町史（北谷町教育委員会）

図Ⅲ-4-18 北谷駅周辺の商店分布(昭和19年頃)

(2) - 3 普天間集落に関する既存文献等から得られた知見

【地形】	・琉球石灰岩の海岸段丘上に位置する。地形は北西部に傾斜しており、浸食谷となった普天間川に接する。 ・石灰岩の山やガマ（洞穴）が多いという特徴がある。
【集落】	・普天間は、交通の要所で多くの公共官庁（普天満宮、小学校等）が置かれた。 ・神宮から並松街道沿いには、商店が立ち並び、中部の中心地として繁栄していた。 ・集落の南から西にかけて広い耕地があつて専業農家も多く、牛・馬・豚・山羊などが飼育されていた。
【宅地】	・屋敷囲いは、ガジュマル、島竹、フクギ等の雑木で、それらは台風対策と同時に日常生活の資源として利用された。（ガジュマル：薪、竹：籠類や用材、フクギ：建築用材 等）

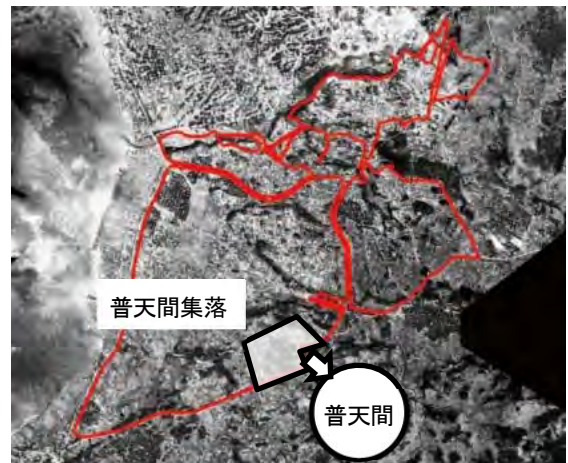
歴史・文化	生活空間	【屋敷】・家は瓦屋、ダキガヤ（竹茅）、カヤブチ（茅葺）などがある。 【学校】・普天間国民学校
	生産	・普天満宮や官公庁があり、また交通の要所であったことから、宜野湾村内では、商業従事者が多かった。 ・主な生業は農業で、サトウキビ栽培をしていた。集落内には、野嵩・新城と共同出資した製糖工場があった。
	史跡	・ムラヤーの拝所：ムラヤー敷地内に3つの祠があった。 ・志礼：ニーヤー（根屋）であった。屋敷内には獅子屋もあった。 ・東江：ニーヤー（根屋）であった。
	移転先	昭和21年から、戦後普天間に収容されていた人々の帰住が許可され、普天間の復興も始まった。しかし、旧集落地はキャンプ瑞慶覧に強制接収されていたため、 <u>住民は現集落地（集落南東部）に住んだ。</u>
自然環境	地形・地質	・琉球石灰岩の海岸段丘上に位置するが、地形は北西部に傾斜しており、浸食谷となった普天間川に接する。 ・石灰岩の山やガマ（洞穴）が多いという特徴がある。
	緑地	・フィールーザン：集落北東に位置する丘陵地。墓がたくさんあった。 ・スティチャマ：ソテツや松が植えられており、頂上部には石灰岩でつくられた祠がある。（拝所）
	水資源	・フティマガーラ：子供たちが泳いで遊ぶ場所であり、馬に水浴びをさせる場所でもあった。 ・イシジャー：普段は水の無い川。 ・ヒージャーガー：正月のワカミジ（若水）や子供が生まれた時のナージキー（名付け）の水を汲んでいた。（拝所）



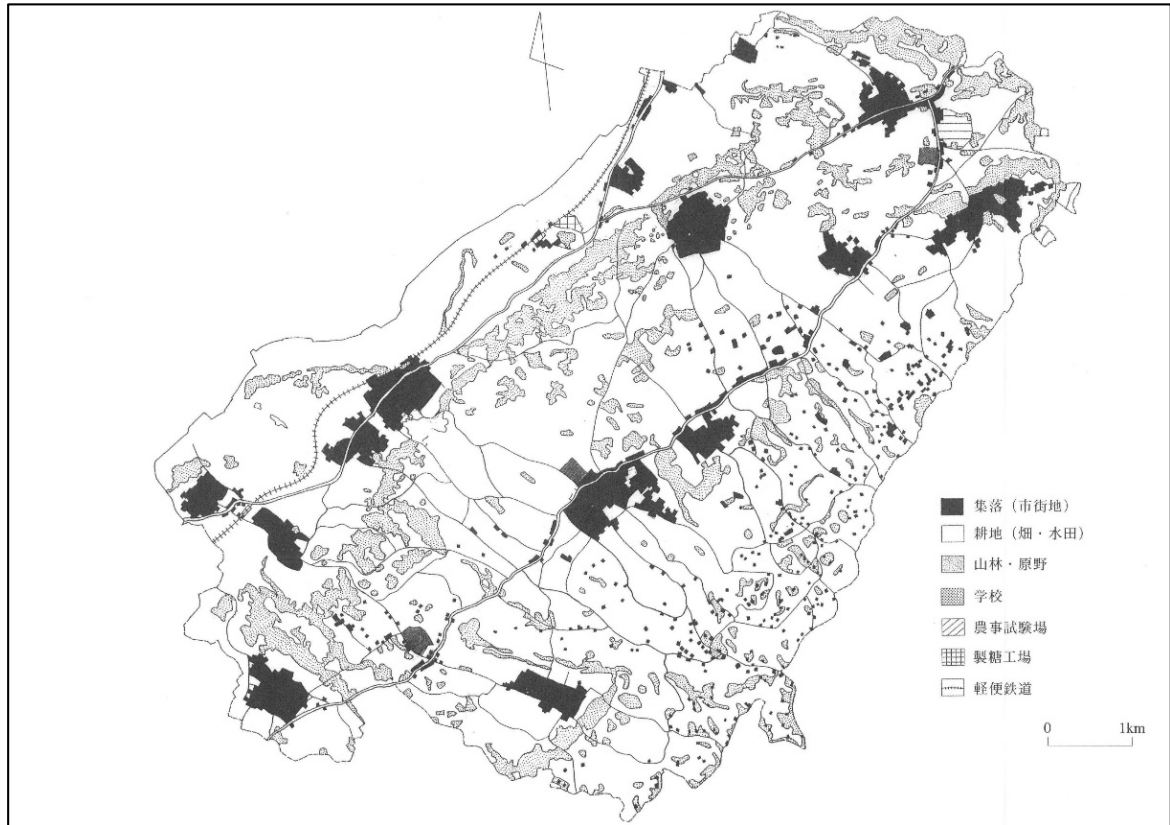
図Ⅲ-4-21 普天間集落構成要素図



図Ⅲ-4-22 普天間集落周辺の地形
(米軍作成地図(1948年作成)に加筆)



図Ⅲ-4-23 普天間集落の移転先



出典：宜野湾市史（宜野湾市教育委員会）

図Ⅲ-4-25 昭和 19 年の土地利用図

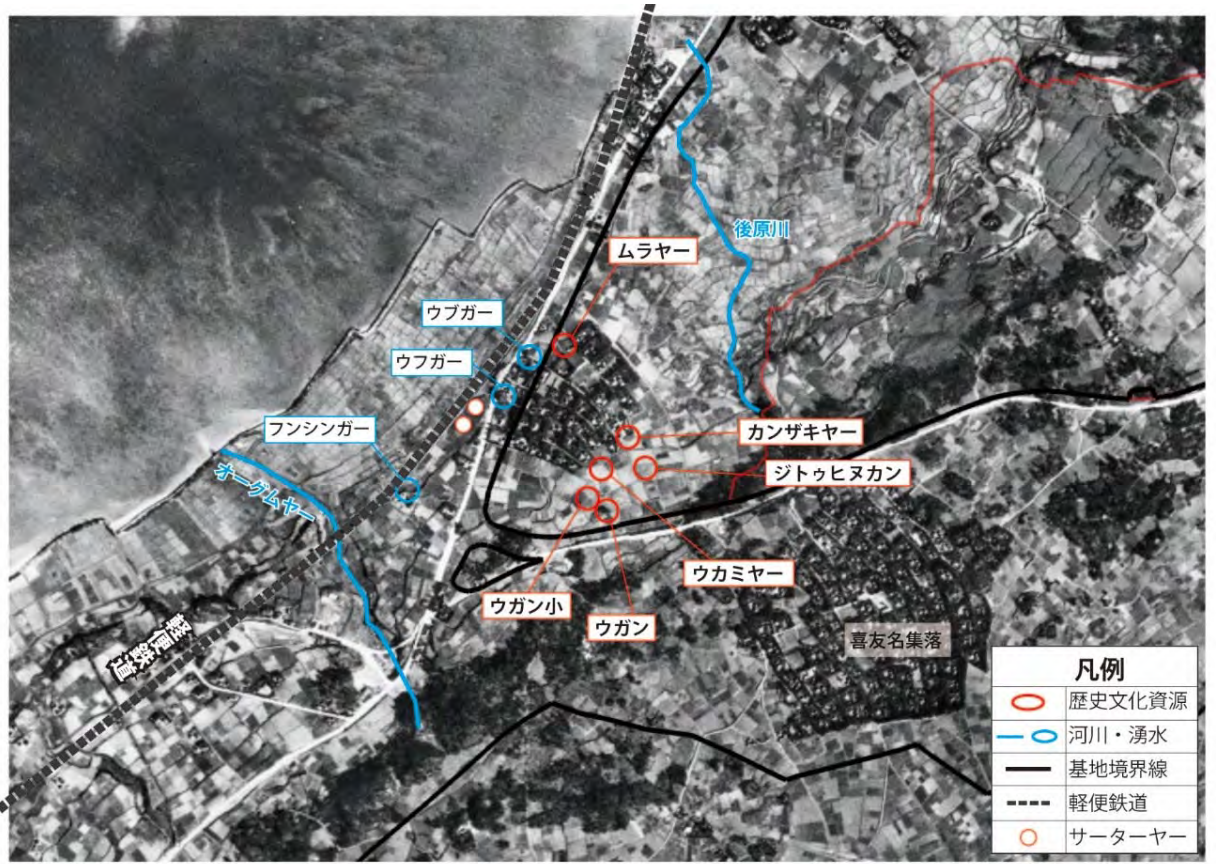
(2) - 4 伊佐集落に関する既存文献等から得られた知見

【地形】・北部は標高 5m以上の海岸低地、南部は海岸段丘から成立。南側に丘陵、西側は伊佐浜に面していた。

【集落】・碁盤目状になっており、集落中央には道幅が広い(2~2.5m)ナカミチがあり、ナカミチと直角にスージ道が広がっていた。スージ道は馬車が通れる 1m程度もあったが、多くは歩ける程度の狭い道であった。

【宅地】・屋敷囲いは、普天間集落同様、ガジュマル、島竹、フクギ等の雑木であった。

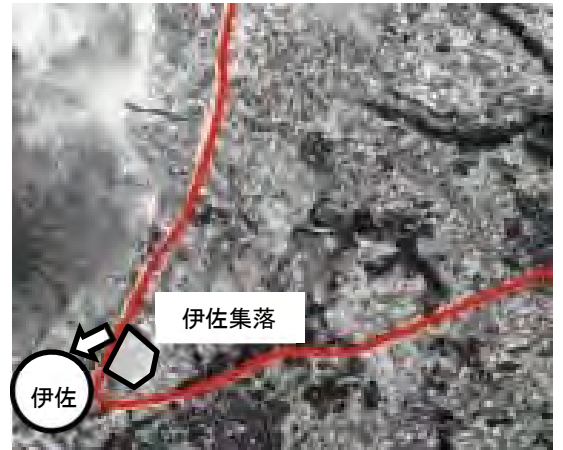
歴史・文化	生活空間	【集落】・宜野湾村内で最も戸数が少ない集落であった。
	生産	<ul style="list-style-type: none"> ・農作物の大半はサトウキビとサツマイモで、三分の一ほどが水稻と水芋(ターム)であった。 ・集落南側及び北西側には水田、集落内及び北東側には畑が広がっていた。 ・集落西側に 2 基のサーターヤーがある。
	史跡	<ul style="list-style-type: none"> ・ウフガー及びウブガー ・ウグワン：大きな岩の前に香炉が安置されている。 ・ウグワン小：大きな岩の前に香炉が安置されている。 ・ジトウヒヌカン ・カンザキヤー 等
	移転先	・昭和 22 年になって野嵩や普天間の収容所から住民が戻ったが、昭和 30 年に字域の大部分をキャンプ瑞慶覧用地として強制接収されたため、住民は他地へ転出したり、海涯へ移民する者も出た。集落は現在の国道 58 号沿いに移転した。
自然環境	地形・地質	・地形的には現在の伊佐交差点を境として、北部は標高 5m以上の海岸低地、南部は二段からなる海岸段丘から成立しており、集落は県道の東側の段丘下に位置していた。
	緑地	
	水資源	<ul style="list-style-type: none"> ・ウブガー：赤子に浴びせる水として使用。 ・ウフガー：飲み水や若水として使用。 ・フンシンガー：主に生活用水(牛馬や農具等を洗う)として使用。



図Ⅲ-4-26 伊佐集落構成要素図

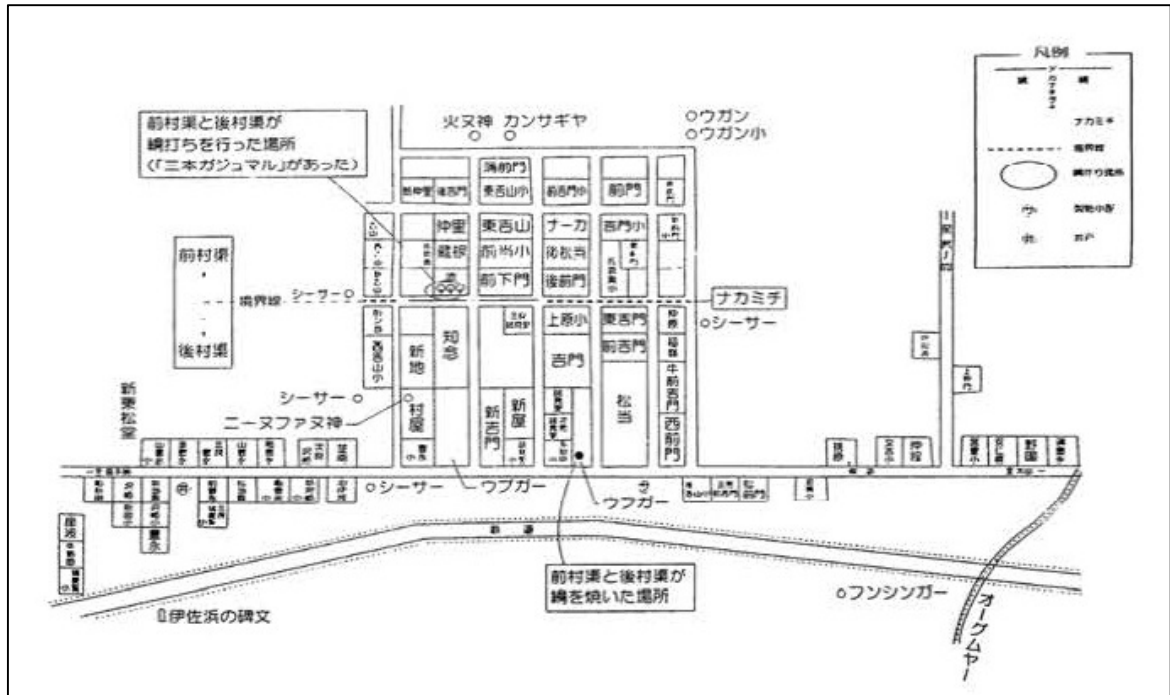


図Ⅲ-4-27 伊佐集落周辺の地形
(米軍作成地図(1948年作成)に加筆)



図Ⅲ-4-28 伊佐集落の移転先

【参考資料】



出典：伊佐誌（伊佐区自治会）

図Ⅲ-4-29 戦前の伊佐集落の略図

(2) - 5 安仁屋集落に関する既存文献等から得られた知見

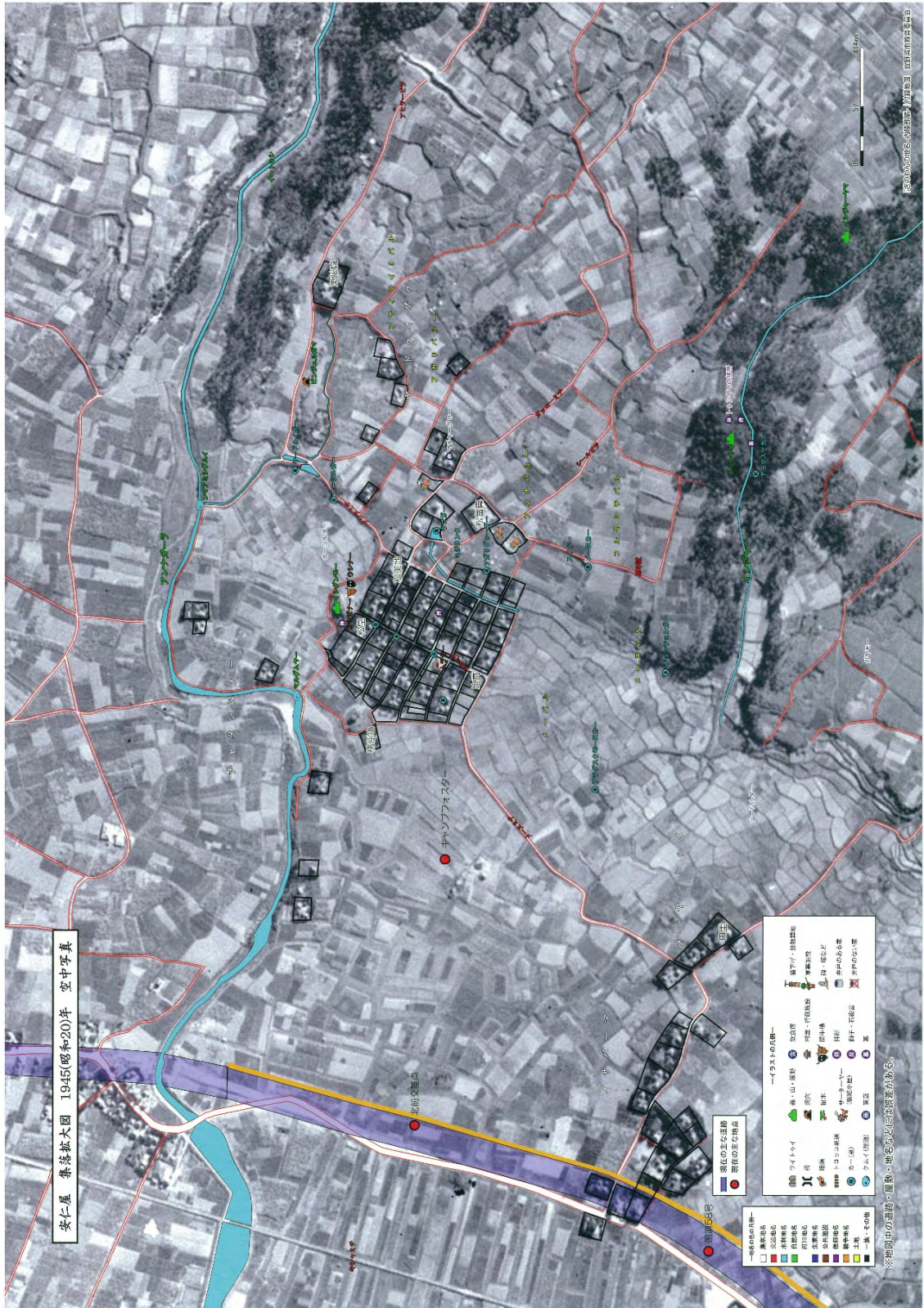
【地形】・西部において普天間川河口の海岸低地、他が琉球石灰岩の海岸段丘（下位面 30 m、上位面 50～60m）に位置していた。
 ・集落の北と南にある 2 つの川と石灰岩台地による豊富な湧泉群が安仁屋の自然環境の特徴であった。

【集落】・純農業部落で、主要作物はサトウキビ、水稻、甘藷、水芋であった。

【宅地】・屋敷囲いは、普天間集落同様、ガジュマル、島竹、フクギ等の雑木であった。

歴史・文化	生活空間	【井戸】・比較的水が豊富であったため、家庭の井戸はほとんどなかった。
	生産	・稲作やサトウキビ栽培が主な農業地域であった。
	史跡	<ul style="list-style-type: none"> ・ビンジュールガマ：普天満宮の洞穴まで続いていると言われていた。 ・ミージ：安仁屋のニューヤ（根屋）であった。敷地内にウカミヤ（御神屋）があった。 ・ウタキ（御嶽）：集落南東にあるトゥンヤマにあった拝所。 ・トゥンヤマの拝所：トゥンヤマにある石の祠。 ・遥拝所：トゥンヤマにあった拝所。
	移転先	戦後まもなく全域が米軍基地キャンプ瑞慶覧として強制接収され、住民は隣接する普天間・新城・野嵩などに移り住んだ。このため安仁屋区の行政事務は、はじめは多くの地区住民が移転した現在の野嵩 3 区に設置された区事務所で行われていたが、昭和 37 年の市制施行にともなって安仁屋区の名称は消滅した。
自然環境	地形・地質	<ul style="list-style-type: none"> ・西部において普天間川河口の海岸低地、他が琉球石灰岩の海岸段丘に立地していた。 ・集落の北と南にある 2 つの川と豊富な湧泉群が安仁屋の自然環境の特徴であった。 ・集落から東と南は標高が高く、西と北に向け低くなっていた。南東部は石灰岩の台地であったため、小さな集落ながら多くのカーを有していた。
	緑地	<ul style="list-style-type: none"> ・インゲンモー：香炉があり、拝所となっている。南東隣にウシナー（闘牛場）があった。 ・トゥンヤマ：ウタキや遥拝所、トゥンの拝所がある。
	水資源	<ul style="list-style-type: none"> ・アンナガーラ：普天間から流れてきた川で水量は多くなかった。 ・イシジャー：普段は水が無かった。 ・ウブガー：正月のワカミジ（若水）や子供が生まれた時のナージキー（名付け）の水を汲んでいた。（拝所） ・メーヌカー：集落内に送水する水道の水源地となっていた。 ・チョンチョンガー：水量が豊富であり、集落南西側に広がる水田に利用された。 ・アラグスクモーヌカー：アラグスクモーにあった小さなカー（拝所）

【参考資料】

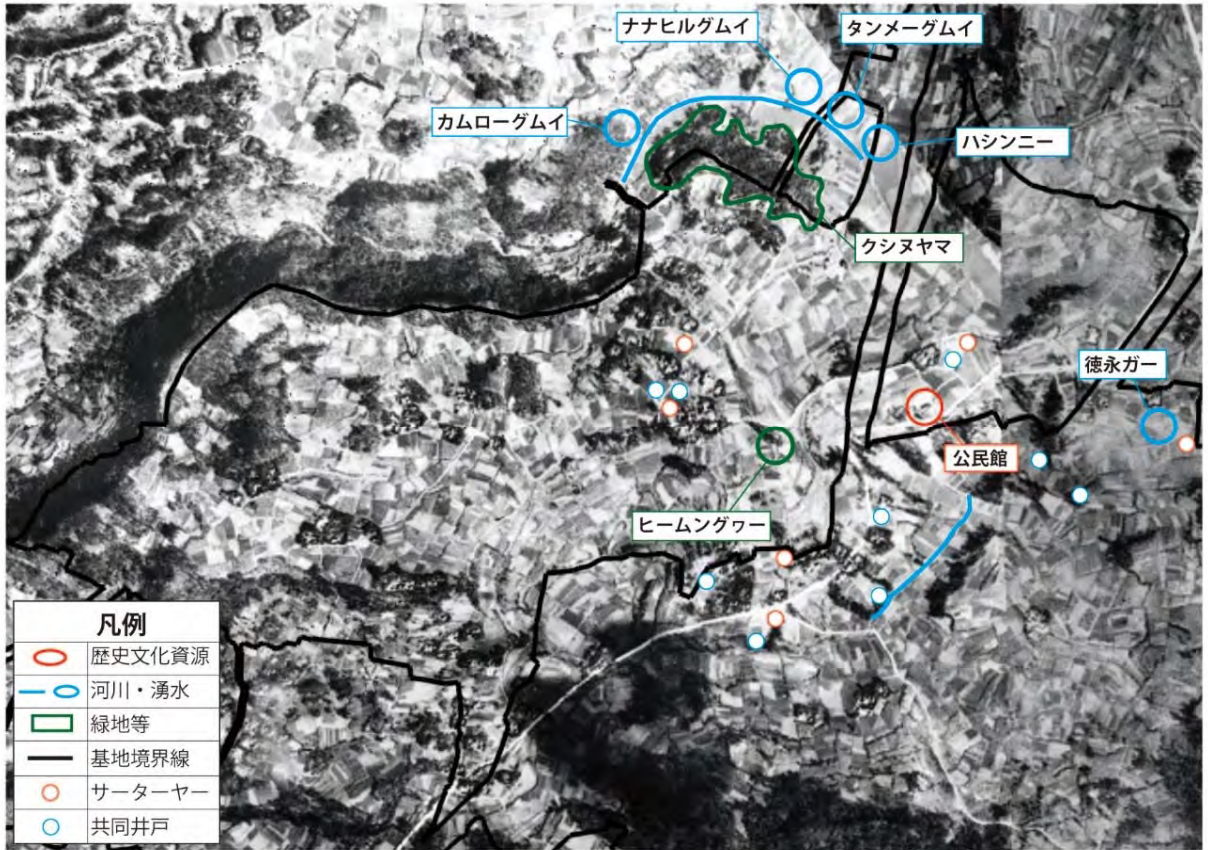


図Ⅲ-4-33 安仁屋集落周辺の地名

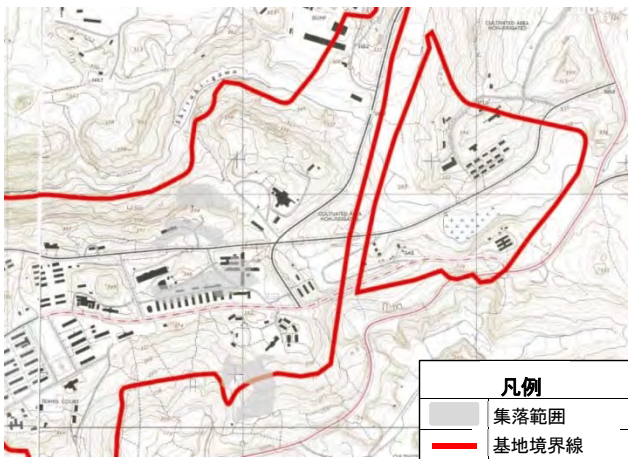
(2) - 6 屋宜原集落に関する既存文献等から得られた知見

【地形】	・泥灰岩と琉球石灰岩から成る丘陵地の尾根及び傾斜地に位置する。 ・集落後方のクスヤマの谷あいには、河川やクムイがあり、水が豊富であった。
【集落】	・もともと喜舎場の屋取集落であったため、家屋が散々していた。
【宅地】	・ほとんどが南向きで、屋敷は道路に面しているところが良いとされていた。(三角形の敷地や四方が道路に囲まれている屋敷は嫌われた。) ・屋敷囲いには竹やフクギ、ガジュマル、ツバキ、ユーナ等があり、屋敷林は防風対策から建築・生産・生活まで幅広く活用されていた。
【道路】	・起伏の大きい地形であったため、不便な小さい道が多かった。
【その他】	・部落発祥の歴史が比較的新しいせい、村落としての聖地や拝所等を持たない。そのため、年中行事などはエイサーを除いては村落が主体となるものはなく、家族・親族を中心に行われる。

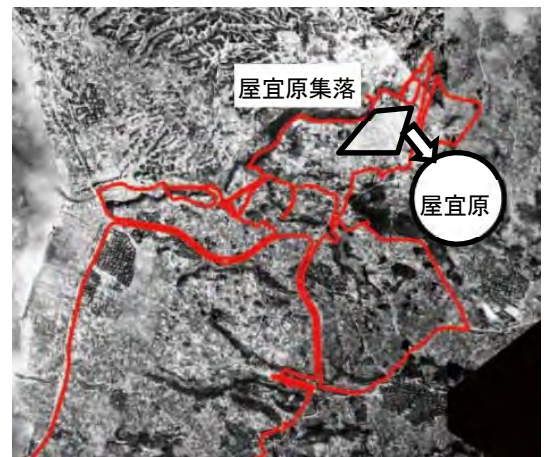
歴史・文化	生活空間	<p>【集落】・屋宜原はもともと喜舎場の屋取集落であり、集落形態は屋取集落の例にもれず家屋が散在していた。昭和 19 年頃の世帯数は 60 戸であった。</p> <p>【屋敷】・それぞれ樹木で囲まれ、家屋はほとんどが茅葺。どの家庭にも屋敷内に主屋、あしやぎ、家畜小屋がある。</p> <p>【共同施設】・部落の倶楽部（公民館）とサーターヤー、共同井戸があげられる。共同井戸は十数か所ほどあり、飲料や生活に使う水はほとんど共同井戸を利用していた。</p>
	生産	・サトウキビ生産が中心で、米はわずかの家しか作っていなかった。
	史跡	・部落発祥の歴史が比較的新しいせい、村落としての聖地や拝所などを持たない。そのため、年中行事などはエイサーを除いては村落が主体となるものはなく、家族・親族を中心に行われる。
	移転先	<p>・戦前の集落の大部分は屋宜原にあって、戦後それらが西前原に移動した。330 号の西側の高台にあったが、戦後は軍用地に接収されたため、東側の傾斜地と窪地に居住。</p> <p>・1947（昭和 22）年に軍用地が一部開放されたので、旧部落の南東部、かつて畑だった現在地に移り住むようになった。</p>
自然環境	地形・地質	<p>・第三紀層^{でいかいがん}泥灰岩と一部琉球石灰岩からなる。土壌はジャーガルが主である。</p> <p>・ヒームングワー：丘陵地の一角（標高約 110m）で、集会の合図や非常時にブラを吹く場所であった。</p>
	緑地	
	水資源	<p>・クスヤマ山後方の谷あいには流れている川があり、下流にはタンメーグムイ、ナナヒルグムイ、カムローグムイがあった。</p> <p>・タンメーグムイ・ナナヒルグムイ：水深が深く、入る人もいないほどであった。</p> <p>・ハシンニー・カムローグムイ：洗濯や水浴びをし、馬などにも浴びせていた。</p> <p>・徳永ガー：干ばつ時、ほとんどの井戸の水が枯れたが、徳永ガーだけは涸れなかった。</p>



図Ⅲ-4-35 屋宜原集落構成要素図



図Ⅲ-4-36 屋宜原集落周辺の地形
(米軍作成地図(1948年作成)に加筆)



図Ⅲ-4-37 屋宜原集落の移転先

【参考資料】



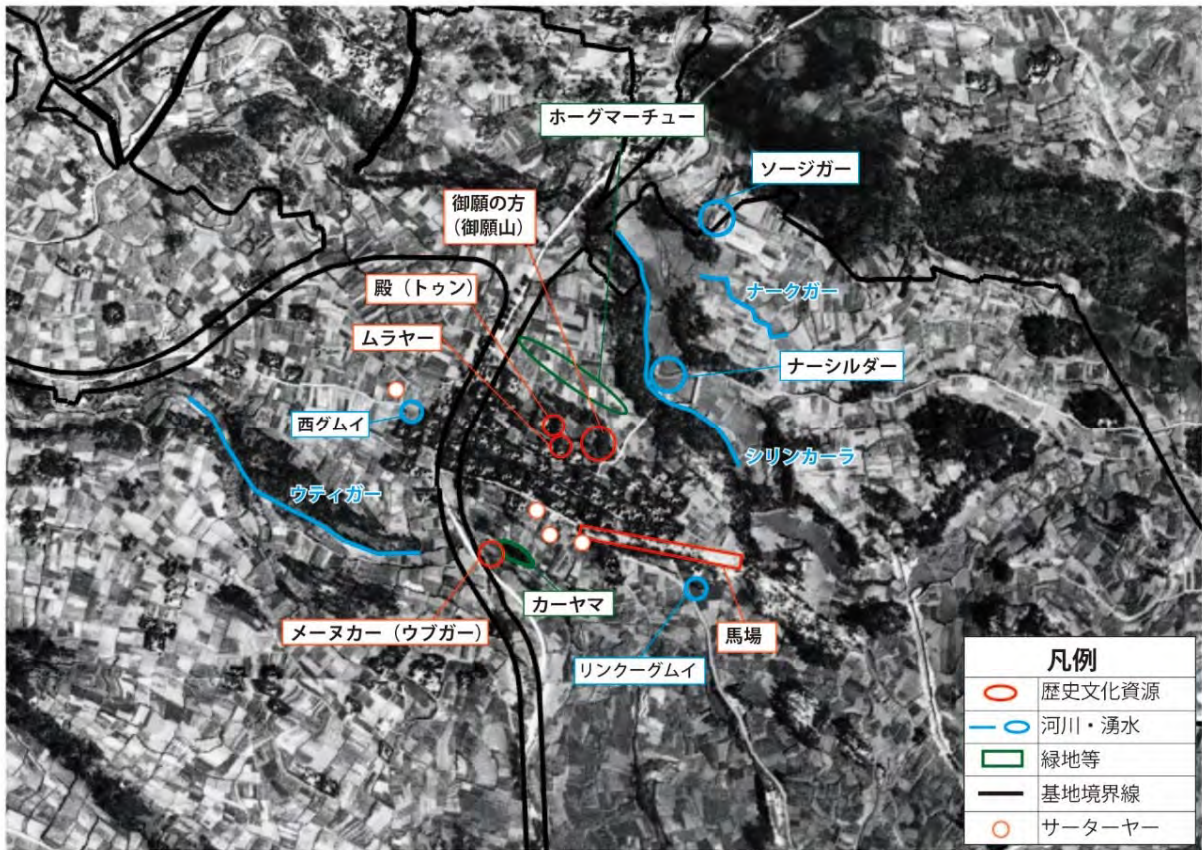
出典：北中城村史（北中城村教育委員会）

図Ⅲ-4-38 屋宜原集落の道

(2) - 7 瑞慶覧集落に関する既存文献等から得られた知見

<p>【地形】・集落のほとんどがマージであり、集落南部（馬場以南）はジャーガルとなっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集落は高い位置（海拔約 60m）に位置していた。ほとんどが平坦地であり、周囲には田畑や山林があった。集落の地下には鍾乳洞が発達している。 <p>【集落】・集落内の宅地は井然と区画され、ほぼ碁盤目状になっていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集落西側を南北に延びる道（県道）には、蔡温の時代に植えられたと伝えられる松並木が続いていた。 <p>【宅地】・家々は台風などに備えて、石垣や土手にフクギ・竹林などを配した家囲いを巡らせた。屋敷囲いは屋宜原集落と同様の樹種、活用をしていた。</p> <p>【道路】・長さ約 220m、幅約 27mの馬場があり、両側に並松が並んでいた。近在で唯一広大な馬場で、沖縄競馬大会や学校対抗運動会等が催された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部落内の道幅は荷馬車が通るくらいの広さがあった。

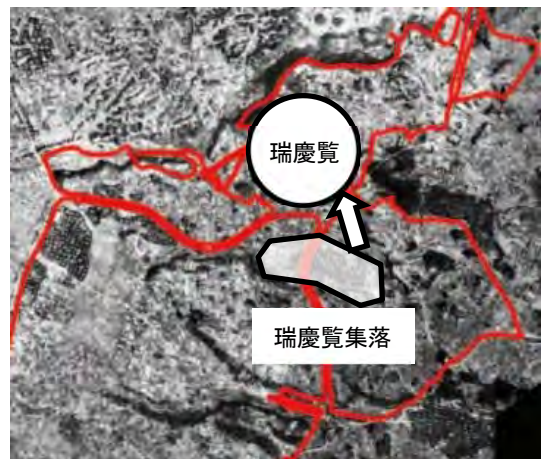
歴史・文化	生活空間	<p>【集落】・集落は高い位置（海拔約 60m）に位置していた。ほとんどが平坦地であり、周囲には田畑や山林があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集落形態は、碁盤の目のように井然と区画されていた。 <p>【屋敷】・家々は石垣やフクギ、竹等の屋敷囲いがあった。</p> <p>【馬場】・長さ約 220m、幅約 27mの馬場があり、両側に並松が並んでいた。明治・大正期には沖縄競馬大会や学校対抗運動会等が催された。馬場の東の隅にはウシナーがあった。</p> <p>【ムラヤー】・殿に隣接して作られた。</p> <p>【道路】・集落西側を南北に延びる道の両側には、蔡温の時代に植えられたと伝えられるリュウキュウマツの並木が続いていた。</p>
	生産	<ul style="list-style-type: none"> ・集落西側では、トマト、きゅうり、ユリの球根などが大規模に栽培された。
	史跡	<ul style="list-style-type: none"> ・殿（トゥン）：集落中央部に位置し、部落民の信仰の中心であった。 ・御願の方：殿の東方約 100mに位置し、松の巨木が鬱蒼とそびえ立つ聖域であった。その地下は自然の洞窟となっている。 ・メーナカー：集落の聖地 ・ソージガー、ナークガー、ナーシルダーは拝所となっていた。
	移転先	<ul style="list-style-type: none"> ・北中城村の西部に位置する。集落前良いが米軍に世襲され、集落は小字西原に窮屈を強いられている。
自然環境	地形・地質	<ul style="list-style-type: none"> ・集落のほとんどがマージであり、集落南部（馬場以南）はジャーガルとなっている。 ・部落の地下には鍾乳洞が発達している。
	緑地	<ul style="list-style-type: none"> ・ホーグマーチュウ戦後は茅だけが伸びていたが、昔は松が多く生えており抱護の役目をしていたと考えられる。
	水資源	<ul style="list-style-type: none"> ・メーナカー：ウティガーへ流れ込み、北谷ターブックウへ流れる。ウブガーとして聖水であったと同時に生活の水として利用された。 ・ソージガー：大量の水が流れており、現在でも花卉園芸の灌水に利用。 ・ナークガー：夏は冷水が湧き出していたが、冬になると出なかった。 ・シリンカーラ：御願の方の北側に位置する川。ウブガーであった。 ・ナーシルダー：シリンカーラの近くにあり、その水源はウブガーで生活の泉となっていた。 ・西グムイ・リンクーグムイ：農作業後の手足を洗う場所



図Ⅲ-4-39 瑞慶覧集落構成要素図

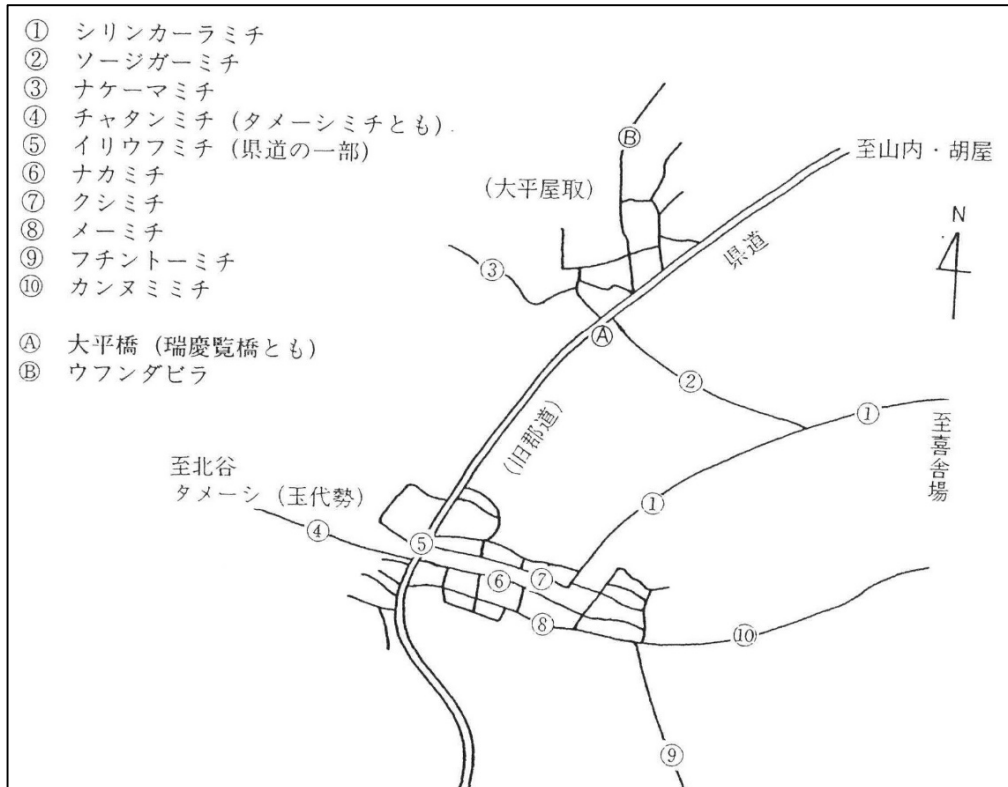


図Ⅲ-4-40 瑞慶覧集落周辺の地形
(米軍作成地図(1948年作成)に加筆)



図Ⅲ-4-41 瑞慶覧集落の移転先

【参考資料】



出典：北中城村史（北中城村教育委員会）

図Ⅲ-4-42 瑞慶覧集落の道